

この本と私

読むことで、気付くこと
書くことで、判ることがある

「華岡清洲の妻」有吉佐和子著

紀州紀ノ川に近い那賀で、1804年世界で初めて全身麻酔によって乳ガンの摘出手術を成功させた華岡清洲。その半生を描いた有吉佐和子の代表作です。清洲は、祖父より3代続く田舎医者ですが、先代より優れたカスパル医学を学んで、外科医療に革命を起こします。当時の手術は麻酔がなく、患者は苦痛に耐えなければなりませんでした。その苦しみから患者を解放するために、清洲は麻酔薬の開発に着手しました。その開発に関わった清洲と家族の献身的で、壮絶な事実がこの本に綴られています。清洲の母於継と清洲の妻加恵の清洲に命を預けての麻酔薬の人体実験がそのひとつです。麻酔薬には朝鮮朝顔（曼陀羅華）が使われていましたが、犬や猫での動物実験の成功から出しきれないでいました。業を煮やす清洲に於継はついに自身の体を提供します。その際の決意からは子のためなら命も惜しまない母の強さが伝わってきます。一方、加恵の主人を支える気概は負けていません。清洲は苦渋の決断の末、二人に麻酔薬を試します。二人に二度、四回薬の配合を変えた結果、於継は死亡、加恵は失明します。また、清洲自らも試薬します。人体をしてみる期間の末、通仙散という麻酔薬を開発し、8歳の乳ガン患者の手術に成功しました。その期間は15年という長きにわたるものでした。医学発展の影にある、個人のすさまじい生、そして、嫁と姑の対立と葛藤を、女性の眼から描いた筆致に迫力を感じました。現在の紀の川市にある清洲の診療所跡、春林軒から当時を伺い知ることが出来ます。

F・M・

〈新潮社〉

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞